シラー『ティレニア海の嵐』解説と試訳および注釈
――ウェルギリウス『アエネーイス』1,34-156 との比較研究――

高畑　時子

1．解 説

シラー(Friedrich von Schiller, 1759-1805)は，ゲーテ時代において熱狂的ともいわれるギリシア文化熱がドイツ各地で巻き起こる中，当時のドイツ人劇作家としては比較的珍しくラテン文学作品の翻訳を手がけている．シラーが行ったラテン文学作品の翻訳にはウェルギリウス『アエネーイス』1 巻 34-156 行，2 巻，4 巻の訳がある．そしてそれぞれに，『ティレニア海の嵐』(*Der Sturm auf dem Tyrrhener Meer*)，『トロヤ陥落』(*Die Zerstörung von Troja*)，『ディードー』(*Dido*)との題がつけられている(『アエネーイス』1 巻，2 巻，4 巻訳などという題ではないことに注意．これは単なるラテン文学の翻訳ではないことを示唆している)．このうち，シラーは『アエネーイス』1 巻 34-156 行を原典と同じヘクサーメター(Hexameter，ドイツ語発音)の形で翻訳している．彼がそれを手がけたのは弱冠 21 歳頃のことである．シラーは後の 33 歳頃にも『アエネーイス』2 巻と 4 巻全体を翻訳したが，それらは形式をヘクサーメターではなく，8 行詩(シュタンツェ Stanze)に変えている．シラーがヘクサーメターでは 1 巻を全部訳さず，一部のみにとどめたのは，『アエネーイス』をヘクサーメター形式で独訳するには無理があると考え，それ以上訳すのを断念したからだと思われる．

当時，シラーはこのヘクサーメターの 1 巻の抄訳を *Schwäbisches Magazin von gelehrten Sachen* という地方誌に公表したが(Stuttgart 1780, 11. Stück, S.663-673)，それに関する世間の評判は必ずしも芳しいものばかりとは言い難かったのであろう．ヘクサーメター訳の難しさについては，のちの新聞の書評欄にもコメントされている：Wenn Virgil wirklich metrisch übersetzt werden soll; dann ist der Hexameter, er sey im deutschen auch noch so unbiegsam und unharmonisch, unentbehrlich. (Rezension in: *Neue nürnbergische gelehrte Zeitung*, 1792, S.139-141; vgl.Ingenkamp S.270, 62) シラーの友人のケルナー(Christian Gottfried Körner, 1756-1831)もシラー宛の手紙で，Wäre Virgil jetzt in dem Falle ein deutsches Gedicht zu schreiben, sein für Wohlklang so empfängliches Ohr wählte sie gewiß statt

der Hexameter. [...] Die Hexameter sind nur einzelne Blätter.と書いている(Körner an Schiller, in: *Schillers Werke Nationalausgabe* Bd.34 I, S.111-113; vgl. Bd.15 I, Ingenkamp S.262, 36). このように,『アエネーイス』を無理にドイツ語でヘクサーメター訳するならば，韻律の整合性を重視するあまり，訳文がどうしてもぎこちなく，全体の調和に欠け，細切れな印象になってしまうことは当時から既に指摘されていた.

ヘクサーメター訳に無理があると思われることについては，主に以下の原因が挙げられる.

１）語彙そのものの問題．シラーはヘクサーメター形式で翻訳する際，韻律に合わせることに注意を払うあまり，自然な訳語を選べないこともあった．本稿論者にとってはもちろん，当時のネイティブドイツ人ですら耳で聞いただけでは理解しにくいような語彙や，辞書で調べてようやく意味がわかるような珍しい語彙を用いた.

２）単語数の問題．ラテン語では 1 語で済むような文が，ドイツ語では複数語になることが多い．たとえば，abdidit「隠した」(『アエネーイス』1,60)をシラーは er hat gekerkert「投獄した」(34)と，意味は多少脚色して訳しているが，いずれにせよ，このようにドイツ語訳では長くなりがちである．もっとも，このような完了形の場合，シラーは haben を省略することで文を短くすることが多いが，それでも主語を入れるとラテン語よりは長くなる．他にも，ラテン語では 1 語で済む不定詞がドイツ語では zu がつくので長くなったり, 他にも再帰動詞，使役動詞など，長くなる表現は枚挙に遑がない．その上，ドイツ語では定冠詞，不定冠詞がよく使われるため，ドイツ文はラテン文よりも単語数が多くなる．よって，独訳の方がラテン語原文よりも長くなりがちで，訳文の方に本来ならあるべき語の省略が多くなってしまう.

３）文法の問題．ラテン文では単語の語尾変化が厳密であるため，語順が自由である. 一方, ドイツ語はラテン語ほど語尾変化が厳密ではないため, 語順は, 特に動詞の位置はラテン語ほど自由ではない．ラテン文，特に韻文によく見られるように，主語と動詞の位置が離れている，関連する形容詞と名詞の間に動詞など別の句が入っている, などということは基本的にドイツ語散文にはない.

ラテン語とドイツ語を大まかに比較するだけでも，以上のような違いが見られる.

実際，ヘクサーメター訳が多少無理な試みであったと，シラー自身が感じたからこそ,『アエネーイス』1 巻訳は 156 行で中止し，2 巻と 4 巻訳はシュタン

ツェに変更したのだろう．シュタンツェで訳した後は，シラーは『アエネーイス』全巻を翻訳するよう周囲にも勧められたし，本人にもその気があったようであるが，1804-1805 年に Gedichte-Fassung または Säkular-Ausgabe と呼ばれる版で『アエネーイス』2 巻と 4 巻訳を修正し，公表して間も無く，1805 年に 45 歳の若さで世を去ってしまう．

もっとも，本稿は，この 1 巻のヘクサーメター訳の下積みがあったからこそ，シラーが後にシュタンツェ形式による 2 巻と 4 巻の翻案を生み出し，さらにそれを晩年の大作『ヴァレンシュタイン三部作』などの劇作の際に活かすことができたのではと推測する．実際，シラーの本領は戯曲作品においてもっともよく発揮されたが，ドイツ国内の出来事を扱ったものは，そのうちわずか 3 篇に過ぎない．シラー自身はドイツの国境を生涯越えたことがなかったが，シラーの戯曲はイタリア，スペイン，フランス，イギリス，スイスなど，外国の出来事を扱ったものが多い．また，シラーはその題材の多くを伝説や歴史から採ったが，そのような趣向にも若年時代の『アエネーイス』翻訳が多かれ少なかれ影響したであろう．国も時代も異なる『アエネーイス』の独訳の過程で得るものも多かったに違いない．他の翻訳作品や翻案も含め，戯曲の多くをシラーは晩年に執筆し，一部ヴァイマールやベルリーンの劇場で上演もした．

シラーのこの翻訳作品『ティレニア海の嵐』は日本国内でもドイツ国内でも近年では特に研究対象としてはあまり採り上げられていなかったが，本稿はあえてこの作品に焦点を当て，まずは訳文の和訳を試み，その注釈で『アエネーイス』原文と比較検討する．また，それをもとに作品全体の特質を分析し，シラーが困難な仕事の際におこなった工夫というものを簡潔に述べたい．

2.『ティレニア海の嵐』試訳

(Schiller-Text) (Aeneis-Text)

1 Kaum entschwangen sie sich der *Schau* an Siziliens Küsten, 1,34
トロヤ人らは　シチリア沖での視界から　今にも消えんとするところ

2 Freudejauchzend empor in die Höhe mit rollenden Segeln, 35
喜び勇んで空高く　帆をはち切れんばかりに　張り揚げ

3 Und durchschnitten mit ehernen Stacheln die schäumende Salzflut; 35
青銅の舳先で　泡立つ潮波を　切り裂き進んだ

4 So begann aufs neue Saturnias ewige Wunde 36
その時　サートゥルニアの　永遠に癒えぬ傷が

5 Frisch zu bluten, und dachte sie so im innersten Herzen: 36-37
再び鮮血を迸らせ始めて　女神は心の奥底で　思い巡らした
6 »Übermachtet soll ich dem Unternehmen entsagen? 37
「わらわは挫かれ　この計画から　手を引くべきなのか？
7 Nicht abkehren von Latium können den König der Teukrer, 38
ラティウムから　テウクリア人の王を　逸らせぬとは
8 Und das soll mir das Schicksal verbieten – Und Pallas Minerva 39
それをわらわに運命が　禁じているに違いない　―　パッラス・ミネルワは
9 Mochte die argische Flotte verzehren in lodernden Flammen, 40
アルゴス人の艦隊を　燃え上がる炎で　焦がし
10 Mochte die Elenden selbst im wogichten Abgrund ersäufen, 40
哀れな者らの身を　波打つ海淵で　溺れさせる力があったのか
11 Ob dem Frevel von *einem?* Dem rasenden Ajax Oileus': 41
それはたかが一人の冒涜故なのか　オイーレウスの息子
荒れ狂うアーヤクスの.
12 Sie allein vermocht aus den Wolken die reißenden Flammen 42
ミネルワだけが　雲間から　ユーピテルの引き裂くいかづちを
13 Jupiters niederzuflammen, in Trümmer die Schiffe zu schlagen, 42-43
地へ放つ力があったのか　艦隊を木端微塵に　叩き潰し
14 Zu empören die Wogen im Sturm, ihn zu fassen im Strudel, 44
嵐で大波を憤怒させ　渦の中　あの男を捕らえる力があったのか
15 Als ihm durch die durchdonnerte Brust die Feuerflamm hauchte; 44
いかづちで貫かれた　あの男の胸から　炎が息を吐いた時
16 Und vermocht ihn zu spießen an schroffen spitzigen Klippen? 45
あの男を　切り立った鋭い岩で　差し抜く力があったというのか？
17 Aber ich, Fürstin der Götter, des Donnerers Gattin und Schwester, 46-47
されどわらわは　神々の女君主　雷光の王の妻で妹
18 Ich soll jahrelang streiten mit einem heillosen Volke, – 47-48
そのわらわが長年　たかだか一つの邪悪な民と　争わされておる
19 Wer wird künftighin heilig noch nennen Saturnias Namen, 48
誰がなお　サートゥルニアの　御名を崇め
20 Wer noch künftighin kniend sich beugen vor meinen Altären?« 49
誰がなお　我が祭壇の前でひざまずき　ひれ伏そうか」

21 Solche Gedanken wälzt' wütend umher die Göttin im Busen, 50
この考えが　女神の胸中を　猛烈に駆け巡る

22 Und erhub sich ins Sturmvaterland, des tobenden Südes, 51
そして　荒れ狂う南風　嵐のいずる地

23 Wüsteneien; Aeolus' Burg! in grausem Gewölbe 52
荒涼たる地へと登った　アエオルスの城へと！　恐ろしい洞窟の中で

24 Hält er allda die kämpfenden Winde, die heulenden Stürme 53
そこでアエオルスは　抗う風　ひゅうひゅう鳴る嵐どもを抑えつけている

25 Mit tyrannischer Macht in Kerker und Banden gefangen. 54
独裁的な力で　牢獄に閉じ込め　鎖で繋ぐ

26 Grimmig schreien im hohlen Bauche des Felsen die Stürme, 55
暴風どもは　岩塊の空ろな腹の中で　怒り狂って叫ぶが

27 Murren entkräftet hervor – Hoch oben thronet der König 56
轟音も外側では力を失う　―　はるか高みで　暴風を御する王は

28 Stürmebändiger über dem Felsen mit mächtigem Zepter, 57
岩壁の上で　強力な王笏を手に　鎮座し

29 Stillt das Ungestüm, mildet die Wut der erbosten Gemüter: 57
この獰猛さを鎮め　荒れ狂う心の怒りを　和らげる

30 Tät er das nicht, sie brächen hervor, durchwühlten die Meere, 58
彼がそれを怠れば　暴風どもは噴出し　海を引っ掻き回し

31 Schleiften den Erdball, und schleiften den ewigen Himmel 58-59
大地を削り　また永遠なる天空を　掻き乱したであろう

32 Mit sich dahin, und jagten sie weit wie den Staub, durch die Lüfte. 59
それらを自らに巻き込み　塵となるまで空中へ　追い回したであろう.

33 Aber dies alles bedachte schon auch der allmächtige Vater, 60-61
だがこれら全てを　全能の父神も　かねてより憂い

34 Darum hat *er* sie auch in schwarze Gewölbe gekerkert, 60-61
かの憂いゆえ　父神は嵐どもも　漆黒の洞窟へ投獄した

35 Darum auf die Gewölbe getürmet unendliche Berge, 61-62
かの憂いゆえ　洞窟の上へ山また山を　果てしなく積み上げた

36 Darum sie unter den König gebeugt, der kraft seines Bundes, 62
かの憂いゆえ　嵐どもは王にひれ伏した　この王は自分との約束で

37 Wie der Donnerer oben gebot, im Zaum sie zu halten 63
雷光の王が命じるまま　嵐どもを　手綱で御する力や
38 Oder zügellos rasen dahin sie zu lassen vermochte. 63
逆に　ある所へ嵐どもを放して　暴れさせる力も得た
39 Dieser war's, zu welchem itzt also Saturnia flehte: 64
それがこの王　この王に今度は　サートゥルニアが嘆願した
40 »Aeolus, dem der Göttervater und König der Menschen 65
「神々の父王　さらに　人間らの王が
41 Vollmacht gab, zu empören die Fluten und wieder zu legen. 66
高波を起こし　再び鎮める全権を与え賜えた　アエオルスよ
42 Das Tyrrhenische Meer beschifft ein Volk, das ich hasse, 67
ティレニア海を　わらわが憎む民が　航海しておる
43 Ilium und die gebeugten Götzen nach Latium tragend: 68
イーリウムと　征服された邪神らを　ラティウムへと運ぼうと
44 Sporne die Winde mit Kraft, begrabe die sinkenden Maste, 69
風を力強く煽れ　沈む帆柱らを　さらに沈めよ
45 Oder zertrümmere sie, und säe den Pontus voll Leichen. 70
もしくはそれらを藻屑にせよ　大海原一杯に　屍骸を撒き散らせ
46 Sieh, in meinem Gefolge sind vierzehn treffliche Mädchen, 71
ほら　わらわの供に　十四人の素晴らしき乙女あり
47 Und die schönste von allen an Bildung, Deiopeia, 72
そのうち　もっとも見目麗しき女　デーイオペーアを
48 Soll in ehlichem Bund auf ewig die Deinige werden. 73
心からの約束で　とこしえに　そなたのものとつかわそう
49 Soll für dieses Verdienst die Ewigkeit mit dir durchleben, 74-75
この手柄の褒美として　永遠の時を　そなたと共に過ごさせよう
50 Und zum glücklichen Vater von schönen Kindern dich machen.« 75
そしてそなたを　麗しい子らの　幸福な父親にしてしんぜよう」
51 »Königin«, sprach der Windgott hierauf; »dein ist's, zu ersinnen, 76-77
風神はこれに答えた　「女王さま　あなた様は
お考え下さるだけでよいのです
52 Was du nur wünschen mögest, und mein, zu vollziehen. 76-77
あなた様がお望みのことを　そして私は　それを実行するのみです

53 Wandtest du nicht den Zepter mir zu, und was ich hier habe 78
王笏の向きをこの私めの方に　お変えにならないで下さい
私がここで掌握するもの

54 An Gewalt; wem dank ich es sonst, daß der Donnrer mir lächelt, 78-79
そのほか私が賜っているもの　雷光の王が　私に微笑まれるのも

55 Daß ich Nektar darf trinken, und himmlisch Ambrosia kosten, 79
私がネクタルを飲み　神々しいアンブロシアを　味わわせて頂けるのも

56 Mächtig bin im Orkan, und über den Wettersturm walte?« 80
暴風を御するのも　嵐を支配するのも　あなた様の
お陰ではありませんか」

57 Sprach's, und hastig ins hohle Gebirg den eisernen Stachel 81
これを言うなり　素早く空ろな岩山へと　鉄の針を

58 Niedergeschleudert, und hastig wie Heerschar hervor die Orkane, 82
下へ投げつけると　暴風どもは群れを成して　慌てて飛び出し

59 Fürchterlich aus der geborstenen Kluft, und hastig von dannen 83
ひび割れた隙間から　恐ろしく　そこから急激に突出し

60 Brausend und sausend und ungestümm hin über Tal und Gebirge 83
轟音を立て唸り声を上げつつ　猛烈な勢いで　山や谷を越えて去り行く

61 Sturm von Morgen und Abend, und Mittag, der mächtige Hagler, 85-86
朝と晩には嵐　そして昼には　激しい暴風雨が

62 Stürzen über den Pelagus her, und rühren den Grund auf, 84
大海に襲いかかり　海の底から　引っかきまわす

63 Wälzen Gebirge von Fluten hinan an die hallenden Ufer. 86
波の高山を　轟音を立てて　岸へと打ち上げる

64 Da beginnt das Heulen der Schiffer, das Schwirren der Segel, 87
そこで始まるのは　水夫らの叫び声　帆のきしむ音

65 Da entreißen urplötzlich die Wolken dem Auge der Trojer 88-89
そこで一瞬にして雲が　トロヤ人の眼から　蒼天と日の光を奪い

66 Himmel und Tag, der Pelagos wallt in Mitternachtsschauern, 88-89
大海原が　深夜の土砂降りの雨で　荒れ狂う

67 Himmel donnert, und Himmel flammt auf in Tausendgeblitze, 90
天は轟き　天はまた無数の稲妻で　炎上する

68 Tod Tod flammt der Himmel entgegen dem bebenden Schiffer, 91
死を　死を　天が震える船乗りの面前で　焼き焦がす
69 Tod entgegen heult ihm der Sturm! Tod brüllen die Donner. 91
死を　嵐が船乗りに　ひゅうひゅう叫ぶ！
死を　雷鳴が　ごうごう轟かせる.

70 Und Aeneas durchschauert ein kalter Schrecken die Glieder, 92
アエネーアースの　四肢を　冷たい戦慄が走り
71 Jammernd betet er itzt mit gefalteten Händen gen Himmel: 93-94
彼は嘆きつつ　今まさに両手を合わせて　天に祈る
72 »O wie selig preis ich euch nun, wie selig, ihr Helden, 94
「おお　われは今　お前らをいかに幸あれと　褒め称えようか
いかに幸あれと　お前たち勇士を
73 Deren Schicksal es war, an Trojas erhabenen Mauren 95
お前らの運命とは　トロヤの　崇高な城壁の下で
74 Umzukommen, und zu entschlummern im Auge der Väter. 95-96
息絶えること　父祖の目の前で　永眠することであったとは
75 Ach! warum ließ das Verhängnus in meinen Vatergefilden 97
ああ！なぜ運命は　私の古里の野で　私を倒れさせなかったのか！
76 Mich nicht sinken! warum nicht meinen Geist mich verhauchen, 97-98
なぜ致命傷を負わせ　私の魂を　私の息を　引き取らせなかったのか
77 Tödlich getroffen, o du, der Danaer tapferster Streiter, 96
おお　ダナイ人のうち　最も勇敢な戦士
78 Tydeus' trefflicher Sohn, von deiner gewaltigen Rechte? 97-98
テューデウスの　すぐれた息子よ　お前の猛々しい右手で.
79 Wo den furchtbaren Hektor der Speer Achilles' durchrannte; 99
あの恐ろしいヘクトルを　アキッレースの槍が　貫き走り
80 Wo der Riese Sarpedon sank: Des Simois Woge 99-100
あの偉丈夫サルペードーンが　倒れたところ　そこでシモイース河の
81 Wälzt dort manches Streitbaren Schild, und manchen der Helme, 100-101
波により　いと多き勇猛なる者の楯が　いと多き者らの兜が
82 Und noch mancher Tapferen Leiber im Strudel von dannen.« 101
いと多き勇者らの亡骸が　そこから渦潮に巻かれて　旋回する」

83 Sprach's, und ungestümm prasselt der Hagel im Sausen des Nordsturms 102
彼がこう語ると　北からの嵐が轟々と　唸りをあげて通り過ぎる中
84 Gegen die Segel, dem Steuermann trotzen die steigenden Wogen, 103
帆に向かい　豪雨がバラバラと激しく叩き付け　高い大波が
85 Ruder brechen; umschlagen die Schiffe, und toben 104-105
舵取りに逆らい櫂を折る　舟らの向きを変え　激しい高波が
86 Wilde Fluten, und reißt sich hervor aus den Wellen ein Flutfels, 105
荒れ狂う　波の塊が大波から　ちぎれて降りかかる
87 Donnert darüber! Ha! sieh! am Scheitel der Wasserflut hangen 106
その上雷が！　ほら見ろ！　高潮の波頭に
88 Einige noch, und andern drohet der unterste Meergrund 106
まだ何人か引っかかっている　残りの者も　大波が裂けて
89 Durch die berstende Woge, Sturm wütet im untersten Sande; 107
見える海の奥底が脅かす　嵐は海底の砂も巻き込み　荒れ狂う.
90 Drei der Schiffe zerschmettert der West an heimlichen Klippen, 108
舟のうち三隻を　西風が　隠れた岩礁にぶつけて粉々にする
91 Klippen nennen die Latier sie, die mitten aus Wogen 109
それを　ラティウム人らは　クリッペン(岩礁)と呼ぶ　それは波間から
92 Prahlen mit dem entsetzlichen Rücken und spotten des Donners. 109
恐ろしい背峰を誇示し　雷鳴に　びくともしない
93 Drei reißt Eurus an Sand und Gestein, und gräßlicher Anblick! 111
さらに三隻を東風は　砂と岩場にぶつけて引き裂く　ぞっとする光景！
94 Sie zerschellen in Trümmer; und Sand umrollet die Trümmer. 112
それらの舟は　木っ端微塵に砕け散る　砂が舟の残骸を取り巻く.
95 Dort nun stürzen die Fluten das Schiff, das Licias Streiter 113-115
そこで今　高潮がひっくり返すのはこの舟　リキアの闘士らと
96 Und den frommen Orontes getragen, verkehrt in die Tiefe, 113-115
忠実なオロンテースを載せた舟　これが真っ逆様に　海の深みへと落ち
97 Vor sich schwankt er, stürzet aufs Haupt – es wirbelt's die Welle 115-116
彼は前方へよろめき　頭から転倒する　―　波はその舟を
98 Dreimal umher, und hinunter schnappt's der reißende Strudel. 116-117
三度ぐるぐる回し　それを渦潮がひっさらい　下へとぱくりと呑み込む
99 Wenige sind's, die oben noch schwimmen am greulichen Schlunde, 118

何人かが　身の毛もよだつ深淵の　上方でまだ泳いでいる
100 Waffen, Bretter und Iliums Schätze dahin durch die Wellen; 119
武具　舟板　イーリウムの財宝が　波の中へ飲み込まれる
101 Ilioneus' treffliches Schiff, und des tapfern Achates, 120
イーリオネウスの　立派な舟と　勇敢なアカーテースの
102 Abates', und des greisen Alethes sind alle vom Sturme 121
アバースの　そして老アレーテースの舟はみな　嵐に
103 Übermeistert, und ungestümm rast der feindliche Hagel 122-123
打ち負かされ　憎らしき水が　ゆるんだ船板の
104 Durch die schlaffen Bretter hinein, die Wandungen bersten. 122-123
継ぎ目の間へ　猛烈に突進し　舟の内壁は破裂する.
105 Endlich vernahm's der meergewaltige König das Toben 124-125
とうとう　海を御する王は　気づいた
106 Und den greulichen Aufruhr des ewigen Pontus, die Stürme 124-125
この永遠の大洋の　波浪と酷い混乱　暴風が解き放たれ
107 Losgelassen, und Höhen und Tiefen zusammengerühret; 125-126
海面と海底が　上下にひっくり返らんばかりの　ありさまに
108 Drob entbrannt er in grimmigem Zorn – vom obersten Gipfel 126
これに海神は憤慨し　怒りで燃え上がる　―　高波の
109 Einer Wasserflut recket er mählich sein mächtiges Haupt auf – 127
頂上から　そろりと雄々しいこうべを　のばす　―
110 Siehe! da lag durch den Ozean hin die Flotte zerschlagen, 128
ほら！　そこに大海のあちこちに　艦隊が打ち砕かれ　浮いている
111 Unter den Wogen und unter dem Schutt des zerflossenen Himmels 129
大波の下で　崩落した天の　残骸の下で
112 Trojas Namen begraben – Und alsobald dachte der Bruder 129-130
トロヤの名が　葬られる　―　すぐにこの兄は
113 An der Schwester Saturnia Groll und heimliche Ränke: 130
妹サートゥルニアの憤りと　密かな奸計の　しわざと考えた
114 Hastig fordert er Zephyrus zu sich und Eurus und also: 131
すぐに西風と東風を　御許へ召し　こう言う
115 »Was? was habt ihr euch da auf euer Windgeschlecht, Winde, 132-133
「これはどうしたことじゃ　風ども　お前らは　お前ら風の種族に

116 Angemaßt, ohne des Erderschüttrers Gebot solch fürchterlich Wallen 132-133
何を思い上がっておるのじゃ？　この大地を揺るがす者の　命令なしに
117 Zu erregen, und Erd und Himmel zusammenzumengen? 134
これほど酷い混乱を起こし　天と地を　掻き回すとは
118 Ha! Das soll euch – Doch muß ich zuerst die türmende Fluten 135
ふむ　お前らを　―　いや　わしがまず　この聳え立つ高波を
119 Niederbeugen – Künftighin sollt ihr so gnädig nicht fahren. 135-136
鎮めねば　―　これよりは　このような容赦はされぬと思え
120 Eilet flugs von dannen, und meldet eurem Beherrscher; 137
急いでここから去れ　そしてお前らの　主に伝えよ
121 Meldet ihm das: Ich habe zu walten im ewigen Pontus, 137-138
奴にこう伝えよ　このわしが　永遠なる海を支配するのじゃ
122 Er nicht, sagt's ihm; mein ist der gewaltige Dreizack, 138
奴ではなく　奴にこう申せ　あの豪力の三叉の矛はわしのもの
123 Mir, nicht ihm, gefallen durchs Los – In scheußlichen Bergen 139
籤によって　奴にではなく　わしの手中に入ったとな
おぞましい山の中じゃ
124 Eure Behausungen, Eurus, dort ist sein Reich und sein Wohnhaus, 140
東風よ　お前らの住処は　そこが奴の領土で奴の住居じゃ
125 Dort in jenen Palästen mag Aeolus großtun und prahlen, 140-141
その館にて　アエオルスは　威張りふんぞり返るがよい
126 Und wenn Wind und Wetter gebunden sind, über sie herrschen.« 141
風と雷雨を　ともに繋いで　それらを支配するがよかろう」
127 Sprach's, und lange schon sind die Wassergebirge zerronnen, 142
こう言うや　もう水面の隆起が　鎮静され
128 Wettergesammelte Wolken zerflattert, und Sonne schaut wieder 143
群がった雷雲が　散り散りになれば　太陽が再び
129 Lächelnd herab, und spiegelt sich mild im ruhigen Meere. 143
微笑んで下へ顔を覗かせ　静かな水面に　穏やかに映る.
130 Cimothori und Triton zumal, mit kräftigem Arme, 144
キューモトエーとトリートーンが　いっせいに　屈強な腕っ節で
131 Angestemmt stoßen von Klippen die Schiffe, mit mächtigem Dreizack 144-145
舟らを支え上げて　岩から突き離し　強力な三叉の矛で

132 Hilft Posidaon, tut auf die greulichen Strudel und Klippen, 145-146
ポシーダオーンが助けてやり　恐ろしい渦や岩礁より上に　揚げてやる
133 Stillt den Meersturm, rasch jagen dahin die flüchtigen Räder 146-147
海の嵐を沈め　そこへ勢いよく　車が
134 Mit dem Wassergott über die obersten Wirbel der Wogen. 147
海神を乗せ　渦潮の上を渡って　速やかに駆け抜けてゆく

135 So wenn ein zahlreiches Volk in gärendem Aufruhre tobet, 148-149
そのように無数の群集が　怒涛の暴動の中　荒れ狂うと
136 Fackeln schon wallen, und fliegen schon Felsen, und Waffen die Wut beut, 150
たちまち松明の炎がうねり　たちまち大きな石は飛び
狂乱が武器を与える.
137 Und itzt ein verdienstreicher frommer Alter sich fern zeigt, 151
今ここに　功績あり誠実な壮者が　遠くで姿を現せば
138 Schweigen alle, stehn alle alle lauschenden Ohrs da. 152
暴徒どもはみな黙り　みなそこで立ち止まり　みな耳を澄ます
139 Er ist Meister der Herzen, und weicht sie mit Worten der Liebe. 153
その人は彼らの心の師で　愛ある言葉で　彼らを宥める
140 So versank auch der wogichte Pontus, so schwieg auch sein Donnern, 154
そのように波立つ大海も鎮まり　そのように海の雷鳴も　黙り込んだ
141 Als sein Vater sein Haupt itzt erhoben, und über ihn hinflog, 154-155
そのとき彼の父が　そのこうべをもたげ　海を越えて飛んで行くと
142 Himmel entnachtet und umgelenkt hatte die Ross', und in Eile 155-156
天は夜が明け　馬の向きを変え　急いでそこへ
143 Zügellos rasseln dahin ließ den leicht dahinhüpfenden Wagen etc. 156
軽やかに翔る馬車を　手綱を付けず　がらがら音を立て走らせた.

3．注 釈 ――『ティレニア海の嵐』と『アエネーイス』比較研究――

シラー訳のドイツ語は現代のドイツ語と若干異なっている．現代語にはあまり見られない省略，語尾変化，単語などがある.

翻訳では，シラー訳文の左側に行数を，右側にそれにおおよそ相応する『アエネーイス』原典の箇所を挙げた.

注釈では，Vergilius を V の略語で，Schiller は S で表す．また，Aeneis 原典テクストの行数は V.1,1 などと表記する．左の数字はシラー訳の行数を表す.

また，本稿はシラーの底本として Thalheim 版テクストを用いたが，注釈で全ては挙げないが，Ingenkamp 版テクストでは「’」を全て欠いていることを付け加えておく(例えば schnappt’s は Ingenkamp 版では schnappts, Ilioneus’は Ilioneus などといったように．)

訳文の固有名詞のカタカナ表記は原則としてドイツ語読みに従うが(Troja をラテン語読みのトロイアではなくトロヤとするように)，ドイツ語化された語はドイツ語読みで，ラテン語のまま，もしくはドイツ語表記と同じものはラテン語表記にした．一方，注釈の固有名詞はなるべくラテン語読みにした．その際，Glare, P. G. W., *Oxford Latin Dictionary* の表記に従ったが，この辞書にない単語は Lewis and Short, *A Latin Dictionary* に従った.

1　sie「彼らは」はトロイア人をさす．*Schau* が斜体になっているが，「視界(Gesichtskreis)」をさすとの校訂者(Fix, Peter, *Übersetzungen* 854)の注釈がある．
2　V では in altum「海へ」であるところ，S は in die Höhe に empor を付けて「高みへ」と誤訳している．また V は uela dabant「帆を張り」であるのを，S は rollenden を入れて帆が丸々とぴんと張った状態であるのを視覚に訴えて描写する．
3　V では aere「青銅で」．S はそれを mit ehernen Stacheln「青銅の舳先で」と，より説明的に描写する．これは，青銅を打ち付けて補強された舳先のこと．Stachel の元の意味は「とげ」であるが，上部ドイツ語(oberdeutsch)方言で舳先を意味する(vgl. Fix, Peter, *Übersetzungen* 854). 上部ドイツとはドイツ南西部の地方をさし，この作品の掲載誌名にあるシュヴァーベン(Schwaben)地方を含み，そこには S の生地 Marbach がある．
4　韻律を合わせるためか，原文では Iuno であるところ，S はわざわざ Saturnias と書き換えている．ユーノーはサートゥルヌス(Saturnus)の娘であるため，このような別名がある．
4-5　V の cum Iuno aeternum seruans sub pectore uulnus / haec secum「ユーノーは永遠に癒えぬ傷を胸に抱きつつ，次のように呟いた」の sub pectore と secum を一緒にして，S は im innersten Herzen と訳す．また V では Iuno が主語となっているが，S では ewige Wunde「永遠に癒えぬ傷」が主語となっており，原文に無い Frisch zu bluten を付け足すことで，傷の痛々しさを V よりも一層生々しく描写している．この傷の由来とは，トロイア王プリアムスの息子パリスが，ユ

ーノーとミネルワよりもウェヌスが美しいとの審判を下したことにある．そのため, ユーノーとミネルワはトロイアの滅亡を図ることになった. それに加え, トロイアのガニュメーデース(Ganymedes)を, その美しさのあまり夫ユッピテルが天上へとさらったため，ユーノーが嫉妬した.

5　V では secum「心中」のみであるところ，S は im innersten Herzen「心の奥底で」と innersten を付け足し，ユーノーの複雑な胸中を表している.

7　Latium とはローマを含むイタリアの中部地方の名．den König der Teukrer (V は Teucrorum regem)「テウクリア人の王(を)」とはアエネーアース(Aeneas)を指す．テウクリア人とは，トロイアのテウクリア地方の初代王にちなんだトロイア人の別称.

8　Pallas の語源は「娘」，ミネルワの別名．V では Pallas のみであるが，S は Minerva を付け加えている．パッラス・アテーネー(Pallas Athene)とはギリシア語では普通に用いられるが, ラテン語では Pallas Minerva と呼ばれるのはまれである(V.2,615 で Tritonia Pallas とは書かれているが). ミネルワはユッピテルの娘であるから，妻のユーノーよりも立場上は格下となるため，ミネルワは格下であるのにアルゴス人の艦隊に攻撃する力があるのかと問いかけている.

9　argische「アルゴス人の」とは「ギリシア人の」という意味．ホメーロスでアルゴス人とはギリシア人全体を表す．ここで，ユーノーはトロイアから帰還する時のギリシアの船団について語っている．ホメーロス『オデュッセイアー』(1,326 以下)及びアイスキュロス『アガメムノーン』(648-660) 参照.

10　V では ipsos「彼ら自身を」であるが，S はその訳 selbst に die Elenden「哀れな者らを」を付け加えている．また V では summergere ponto「海に沈める」であるところ，S は im wogichten Abgrund ersäufen「波打つ海淵で溺れさせる」とより詩的に描写している．グリム独語辞典には，wogicht の-cht は現代の形容詞語尾-ig の文語的古形で，意味は wogend, von Wogen erfüllt とある．これに相当する現代語は wogig であるが，使用はまれ.

11　Ajax はドイツ語読みでアーヤクス，ラテン語ではアイアークス(Aiax).

12　V では ipsa「(ミネルワ)自らが」であるが，S は Sie allein「ミネルワだけが」と言い換え, ユーノーにはその力が無い, ということを示唆する. aus den Wolken は，ミネルワは雲の上に立っていることを示唆する．V 時代には，ユッピテル同様，ミネルワも雷を落とす力があるとされた．また，V の rapidum [...] ignem「激しい炎を」を，S は die reißenden Flammen「(雲を)引き裂く炎を」と訳し，rapio「引き裂く」から派生した rapidum の原義に忠実に従って訳している.

14　V では euertitque aequora「海面を覆した」であるところ，S は Zu empören die Wogen「大波を怒らせ」と波の擬人的表現を用いている．ihn とはアイアークスのこと．V では turbine「つむじ風で」のところ，S は im Strudel「渦で」と訳している(これが「海の渦」の意味だとすれば，誤訳の可能性がある).

15　原文は transfixo pectore「貫かれた胸から」であるが，S は die durchdonnerte Brust とただ貫かれたというだけではなく，donnerte と雷によって貫かれたことを説明的に記述する．

16　V では scopuloque [...] acuto「切り立った岩で」と形容詞は acuto 一つであるが，S は an schroffen spitzigen Klippen「切り立った鋭い岩で」と形容詞を増やして説明する．韻律を合わせるためと思われる．

17　V では Iouisque であるが，S はユッピテルを des Donnerers と書き換えることで，ユーノーはユッピテルの妻であるから，ミネルワよりも自分の方が雷を操る力を授けられても良いはず，との不満を示唆している．

18　V は una cum gente「たかが一つの民族と」であるが，S はそれに mit einem heillosen Volke と heillosen「邪悪な」を加える．

20　aris imponet honorem?「祭壇に供物を捧げるだろうか」を, S は sich beugen vor meinen Altären と訳し変えている．

21　これも V では Talia flammato secum dea corde uolutans「この考えを女神は燃える心に巡らせつつ」であるが，S は Solche Gedanken「考え」を主語にし，構文を変えている．

23　原文は Aeoliam uenit「アエオリアへとやって来た」であるが，S は Wüsteneien; Aeolus' Burg! と Wüsteneien を付け足し，Aeolia の訳も変えている．また V では uasto [...] antro「巨大な洞窟で」であるが，S は uasto を grausem「恐ろしい」と改変している．Aeolus'は Ingenkamp 版テクストでは Aeolus.

26　原文は magno cum murmure montis「山に大きな轟音を響かせて」であるが，S は montis の意味に相当する des Felsen に im hohlen Bauche と「空ろな腹の中」という語を足している．

27　V は circum claustra fremunt「閂の周りで唸る」であるが, S は Murren entkräftet hervor と異なる訳をしている．また，V の celsa sedet [...] arce「そびえ立つ砦に座る」の sedet を，S は thronet「鎮座する」という語で表している．arce がアクロポリスのイメージで高い支配の座を含意しているのを考えてであろう．

28　Stürmebändiger は V にはない．

29　V は mollitque animos et temperat iras「心を宥め，怒りを鎮める」であるが，

S は Stillt das Ungestüm, mildet die Wut der erbosten Gemüter と，das Ungestüm を付加して長々と訳している．これも韻律をヘクサーメターに合わせるためと思われる．

30-31　sie brächen hervor は V にはなく，S による付加部分．また，V では maria ac terras caelumque profundum / quippe ferant rapidi secum uerrantque per auras「(暴風どもは)海も大地もいと高き天も自らに巻き込んで素早く運び去り，大気中を一掃するにちがいない」と，3 つの目的語が一まとまりとなっているが，S では die Meere と den Erdball と den ewigen Himmel にそれぞれ別の動詞が付いており，V とは異なった構文となっている．また，31 の文は五脚韻しかない(S の脚色が強い箇所であるため，V にはこれに厳密に相応する行がない).

32　jagten sie weit wie den Staub は V にはなく，S による脚色.

33-34　*er* は Ingenkamp 版テクストでは文中であるにもかかわらず Er となっている．次の sie が主語でなく目的語であることを示すため，校訂者が斜体表記にして挿入したのであろう．また，33 と 34 両方にある auch の繰り返しに相当する語は V にはない.

34-36　文頭の 3 度の繰り返された Darum に相当する語も V にはない．また，auf die Gewölbe(35)や Darum sie unter den König gebeugt(36)も S による追加部分.

37　17 と同様，ここでもユッピテルが der Donnerer と書かれている.

38　dahin は S による追加.

39　war's は Ingenkamp 版テクストでは wars，itzt は同テクストでは izt で，現代語で jetzt のこと．また，ここでも S は Iuno を Saturnia と訳す．そして，supplex his uocibus usa est「哀願して次の言葉を発した」の訳を，S は flehte という一文字で表している.

41　V での uento「風によって」の訳が S にはない.

42　Das Tyrrhenische Meer「ティレニア海を」のティレニアは英語読み．Tyrrhenisch(ドイツ語読みでトュレーニッシュ)は即ち「エトルリアの」という意味．名詞形のドイツ語読みは Tyrrhenien「トュレーニエン」.

43　Ilium(V も同じ)とはトロイア(Troia)を指す．V での penatis「国の守護神たちを」を，S は Götzen「邪神らを」と訳している.

44　V の submersasque obrue puppis「舟どもを沈めて見えなくさせよ」を，S は begrabe die sinkenden Maste「沈む帆柱ら(＝舟ども)を埋めてしまえ」と構文を変えている.

45　V では age diuersos「散り散りにせよ」であるのを S は zertrümmere「粉々

にせよ」と意味を変え，さらに過激な表現にする．また，voll は S による追加.
46　V の praestanti corpore Nymphae「並外れて美しい姿のニンフらが」を，S は treffliche Mädchen「優れた少女らが」と訳しており，schön ではなく trefflich を用いることで，女たちの容姿以外の卓越性も含めているのであろう．
48　conubio iungam stabili propriamque dicabo「(デーイオペーアを)確固たる婚姻で結びつけ(そなたの)ものとして与えてしんぜよう」が直訳で，主語はユーノーであり，動詞も未来形であるが，S は Soll in ehlichem Bund auf ewig die Deinige werden と，propriamque を die Deinige とより具体的に訳し，主語を Deiopeia に変え，動詞も現在形にしている．ehlichem は現代ドイツ語では ehrlichem.
49　V での omnis [...] annos「全ての年月＝一生涯」を S は die Ewigkeit「永遠に」と訳している．
51　ist's は Ingenkamp 版では ists.
51-55　この箇所は，S は V 原文から離れ，自由に S の言葉で訳している．特に tu mihi quodcumque hoc regni, tu sceptra Iouemque / concilias, tu das epulis accumbere diuum / nimborumque facis tempestatumque potentem「あなた様こそが私にこの王国のすべても，あなた様こそが王笏もユッピテル神の御恵みもお授け下さり,あなた様こそが私に神々の宴席につくのもお許し下さり，雲と嵐を支配できるようにして下さっています」の部分について，まず S は tu の 3 度の繰り返しを wem dank「その人(＝あなた)のお陰で」の wem の一語で済ませる．また，V では sceptra のみであるのを，S は Wandtest du nicht den Zepter mir zu「王笏の向きを私の方にお変えにならないで下さい」と脚色する．アエオルスよりもよほど身分の高いユーノーが，自分に向かって頭を下げるのをやめるよう，アエオルスが願い出る様子を描写しているのであろう．Iouemque / concilias「ユッピテル様のお慈悲を」も S は daß der Donnrer mir lächelt と婉曲的に訳している．また，tu das epulis accumbere diuum を Daß ich Nektar darf trinken, und himmlisch Ambrosia kosten と S は ich を主語にして，神々の饗宴における飲食の様子をより具体的に描写する．さらに，nimborumque facis tempestatumque potentem という一文を S は Mächtig bin im Orkan, und über den Wettersturm walte? と二文に分けて訳す.
57-59　3 回繰り返されている hastig は V の原文にはなく，S による創作．V の conuersa cuspide「槍の向きを変えて，槍を逆さまにして」は S にはなく，cuspide の訳 den eisernen Stachel「鉄の針を」は原文よりも詩的だが回りくどい．cauum [...] montem / impulit in latus「中は空洞の山の腹を打つ」を S は ins hohle Gebirg [...]

/ Niedergeschleudert と少し意味を変えて訳している．

58-59　wie Heerschar の原文は uelut agmine facto「あたかも隊列を作ったかのように」．また，原文 qua data porta, ruunt「開かれた門から飛び出て」には ruunt と動詞があるが，hervor [...] / Fürchterlich aus der geborstenen Kluft と訳にはなく副詞節のみ．Fürchterlich は S による付け足し．

59-63　Vの原文と離れた，Sによる自由な訳．Sの脚色が強い箇所である．訳文の順序も変えている．et terras turbine perflant「世界中を竜巻で吹き荒らす」をSはvon dannen / Brausend und sausend und ungestümm hin über Tal und Gebirgeとより細かく情景の描写をする．続くincubuere mari totumque a sedibus imis「海に突進し，全体を底の底から(ひっくり返す)」の訳は二行下のStürzen über den Pelagus her, und rühren den Grund aufであり，Sはmariを単にMeerではなく，ギリシア語由来の海を意味する語den Pelagusで表し，表現を詩的にする．続くuna Eurusque Notusque ruunt「東風も南風も一緒くたに押し寄せる」の訳Sturm von Morgen und AbendをVとは異なり，Sはその上に配置する上，訳を全く変えている．次のcreberque procellis / Africus「西南風も嵐をともない頻発する」の訳はund Mittag, der mächtige Haglerと思われる．SはprocellaをHagler (61や83ではHagel)と訳す(Hagelは現代語では雹や霰など空からの落下物を意味するが)．Vはこの箇所で要するに東風，西風，西南風といったさまざまな方向からの風が一度に押し寄せることを意図している．それをSは東風＝朝の嵐，南風＝晩の嵐，西南風＝昼の暴風雨と訳し変え，昼夜問わず，ありとあらゆる方向から風が吹き荒れることを表す．

63のhallendenはSによる付け足しで，ごうごうと轟く，といった擬音語を付加することにより，波が激しく打ち上げるさまをリアルに描写する．

64　V の insequitur「続いて起こる」を S は beginnt と訳し，「水夫らの叫び声や帆のきしむ音」をより目立たせている．

66　V では ponto nox incubat atra「海に闇夜が横たわる」と静かな情景であるのを，S は der Pelagos wallt in Mitternachtsschauern と前後の文脈に意味を合わせたのか V とは逆の意味の訳をする．また，S は 62 では Pelagus と書いているのに，66 では Pelagos とギリシア語尾で書いており，表現に統一性が無い．

66-69　V は天を caelum(1,88), poli, aether(1,90), sidera (1,93)などさまざまな語で表すが，S はそれを全て Himmel と統一して訳し，しかもその Himmel と Tod をこの 4 行の中にそれぞれ 4 度づつ繰り返し，強調する．micat「光る」を S は flammt とより劇的な表現で訳し，それ(Himmel flammt)を次の 68 でも繰り返す．

この繰り返しはVにはない. Vではpraesentemque uiris intentant omnia mortem「勇士らにあらゆるものが目前の死を突きつける」と一行であるのを，Sは Tod Tod flammt der Himmel entgegen dem bebenden Schiffer, / Tod entgegen heult ihm der Sturm! Tod brüllen die Donner と二行に渡って訳す. praesentem の訳は S に無く，逆に，bebenden は S による脚色である．動詞には heulen や brüllen などの擬音語を用いる．また V では uiris と複数形であるのを S は dem bebenden Schiffer や ihm と単数形で訳している．さらに，V では omnia と一言で書かれている一方で，S はそれを der Sturm, die Donner と具体的に描写する．

70　S はここでは意味に加えて語順まで原文に忠実に訳している．原文で Aeneae soluuntur frigore membra「アエネーアースの四肢は寒さで弱る」と Aeneae と membra は離れているのを，S はドイツ語でも Aeneas と die Glieder を離している(通常は少なくとも散文であれば離せない．詩では離されることもあるが).

71　itzt は臨場感を出すために使っているのか，V にはない．gen Himmel は den Himmel の間違いか．V では duplicis tendens [...] palmas「両手を差し延べて」であるが, S は mit gefalteten Händen と違う意味で訳している. また, V の talia uoce「かくも大きな声で」の訳は S には無い.

72　V の terque quaterque beati「三重にも四重にも恵まれた者たちよ」を，S は構文を変えて V のように呼格を用いるほか, wie selig preis ich euch nun, wie selig, ihr Helden と動詞を一人称で訳している上，wie selig を二度繰り返すことで，勇士らが幾重にも恵まれていることを表す．この nun に当たる語は V にはない.

74　V では oppetere「死ぬこと」と一語であるのを，S は Umzukommen, und zu entschlummern と二語に分けて強調している.

75　V では me「私は」が意味上の主語であるが，S では das Verhängnus が主語になっている．das Verhängnus は現代語では das Verhängnis．この接尾辞-nus は古語で，特に 18 世紀までの上部ドイツ語方言で使われた．また，in meinen Vatergefilden の meinen は原文には無く，これはトロイアの野を指す．原文は Illiacis [...] campis「トロイアの野で」.

76　Vではnon potuisse [...] animam hanc effundere「この命を散らすことができなかったのか」と目的語がanimam hancのみであるところ，Sはmeinen Geist mich verhauchenと，michを付け加えて目的語を二つに分けている.

77　Tödlich getroffenはSの創作でVにはない.

77-78　V の o Danaum fortissime gentis [...] Tydide!「おお　ダナイー人(＝ギリシア人)の中で最強のテューデウスの息子よ」の訳が S では原文の位置よりも 3 行

も後に訳されている(本来は 75 にあるべきだが). Tydeus は Diomedes を指す. アエネーアースは彼を負傷させるが彼の母ウェヌスが助ける(cf. ホメーロス『イーリアス』5,243 以下). 後に両者は再び争うが，彼がアエネーアースを負傷させる前にアポッローが介入して争いを止める(同上 5,432 以下).

78　gewaltigen は S による付加.

79　V は saeuus ubi Aeacidae telo iacet Hector「勇猛なヘクトルがアエアキデースの槍で倒れた所で」を S は構文を変え，der Speer Achilles'を主語にし，動詞も durchrannte と意味を変えている. Achilles はドイツ語ではアヒッレースと読み，またはアヒル(Achill)とも呼ばれるが，ここではラテン語表記の「アキッレース」にした.

80　V の correpta「さらわれて」の訳が S には無い. iacet の訳 sank は，V では Hector と Sarpedon の動詞であるが，S では Sarpedon のみの動詞となっている.

81-82　V では tot「これほど多くの」と一語であるが，S はその訳語の manch を三度繰り返して強調する. また im Strudel も S による追加である.

83　61 同様, ここでも S は procella を der Hagel と訳す. 原文 Talia iactanti stridens Aquilone procella / uelum aduersa ferit「このように叫ぶ彼に，北風による暴風雨が轟音をあげながら，帆に向かって雨風を叩きつける」. ungestümm は S による脚色. ferit を prasselt という擬音語で訳して嵐の激しさをより激しく描く.

84　V の fluctusque ad sidera tollit「波を天高く持ち上げる」を S は dem Steuermann trotzen die steigenden Wogen と脚色し，dem Steuermann「舵取り」を付加する.

85　この文には五脚韻しかない(V には六脚韻あるが).

85-86　原文 tum prora auertit et undis / dat latus, insequitur cumulo praeruptus aquae mons「舳先は向きを変え，波に舷側を晒し，そびえ立つ波の山が次々と襲いかかる」とはかなり異なる箇所. tum prora auertit et undis / dat latus を S は umschlagen die Schiffe と短く訳する. また S は insequitur 以下を und reißt sich hervor aus den Wellen ein Flutfels と波の荒々しさをより具体的に描写する.

87　Donnert darüber! Ha! sieh!の原文は V にはない. 荒天の情景を V より激しく描いている.

88　noch も S による説明的な付け足し.

89　Sturm は V では aestus「荒波」. im untersten Sande の untersten も S による説明的な追加(V では harenis「砂で」のみ).

90　V では Notus「南風」であるが，S では der West「西風」と逆の意味. また V の abreptas「運び去り」を S は zerschmettert「粉々にする」と脚色し，舟のい

っそう破壊的な状況を描写する．

91　V では Itali「イタリア人らは」であるが，S は die Italiener ではなく die Latier と訳している．

91-92　原文 saxa uocant Itali mediis quae in fluctibus Aras「イタリア人は波の中にある岩礁を祭壇と呼んでいる」とかなり異なっている．S はこの Aras を「祭壇」と訳す代わりに，その固有名として Klippen「岩礁」と訳す．また spotten des Donners は S による脚色．

92　原文は dorsum immane「巨大な背を」．immanis に「恐ろしい」という含意もあるので，S は単語は違うが 23(uasto→grausem)などと同様，ここでもそちらの意味で訳している．

93　V の urget「追いやる」を S はより過激に reißt「ぶつける」と脚色する．同じく V では in breuia et Syrtis「浅瀬と砂州へ」であるが，S は Syrtis では船乗りの誰もが恐れる難所である，というイメージが湧きにくいことを考えてか an Sand und Gestein と改変して訳す．S は船団が難破するさまを，作品全体を通じてより過酷に描写する．

94　V では inliditque「ぶつける」であるが，S は Trümmer を繰り返すことで，舟が木っ端微塵にまで砕かれることを表現する．aggere cingit harenae「砂の山で取り囲む」の aggere の訳が S にはない(Sand umrollt のみ).

95　ipsius ante oculos「アエネーアース自身の眼の前で」を S は Dort nun と訳す．

95-96　原文 unam [...] / [...] ingens a uertice pontus / in puppim ferit「一隻の舟を，巨大に盛り上がった海はその上から艫を打つ」の訳を S は Dort nun stürzen die Fluten das Schiff, [...] / [...] verkehrt in die Tiefe と二文に分け，S は原文の意味を変え，波が舟をひっくり返して，しかも海に落ちてしまうように脚色する．

97　er は Orontes のこと．V の ibidem「同じ場所で」の訳がない．

98　V は rapidus [...] uertex「急速の渦は」であるが，S は der reißende Strudel「引っさらう渦は」．

99　in gurgite uasto「広大な深淵で」の gurgite を S は 92 などと同様，ここでも am greulichen Schlunde「身の毛もよだつような深淵で」と訳す．

100　uirum「勇士らの」の訳がない．また V では Troia gaza「トロイアの財宝」であるが，S は Troia の別称の Ilium を用い，Iliums Schätze と訳す．

103-104　laxis laterum compagibus omnes / accipiunt inimicum imbrem rimisque fatiscunt「舟はどれもみな横の継ぎ目が弛んで，憎い海水を中に入れてしまい，割れ目のところで大きく裂けてしまう」の訳を S は der feindliche Hagel と die

Wandungen を主語にする．また，imbrem「海水」を S は der [...] Hagel と訳す．61 での der [...] Hagler や 83 での der Hagel は雨や風など，空から雨あられと降るものを指したが，ここでは海水も雨水も混じった水そのものを指す．

105　V では Neptunus とあるのを S はわざわざ der meergewaltige König と訳す．アエオルスはユッピテルに肩入れされて嵐を支配しているが，ネプトゥーヌスはそれより格が高く有力であることを暗示する．

106　ewigen は S による付加．magno misceri murmure「大きな唸り声を上げて沸き立ち」を S は das Toben / Und den greulichen Aufruhr と 105 の vernahm の目的語二つで訳す．また，ここでも S は magno を greulichen「ぞっとする」と脚色する．

107　imis / stagna refusa uadis「海底のたまり水が底の底から逆流し」を S は und Höhen und Tiefen zusammengerühret と表現を変えて訳す．

108　V では grauiter commotus「激しく憤り」を S は Drob entbrannt er in grimmigem Zorn とネプトゥーヌスの燃え上がるような怒りをより劇的に描写する．また，S は 2 と同じく alto (altum)「海」を「高み」と誤解しているので vom obersten Gipfel と訳している．

110　V では uidet と三人称であるが，S はこれを Siehe! と二人称命令形で訳す．アエネーアースへ呼びかける形で改変したためか，S は V の Aeneae classem の Aeneae の訳を省き，die Flotte とだけ訳す．また V では disiectam「撒き散らされ」であるのに対し，90 と同様ここでも S はその破壊度をより強調して zerschlagen「打ち砕かれて」と脚色している．

111　caelique ruina「天の瓦解によって」の訳 des zerflossenen Himmels は，悪天候の比喩的表現．

112-113　oppressos Troas「トロイア人らが虐げられているのを」を S は Trojas Namen begraben とトロイア人が死に絶えることを詩的に表現する．また，nec latuere doli fratrem Iunonis et irae「ユーノーの策略と怒りは弟の目を逃れなかった」という古典語的表現を，S は Und alsobald dachte der Bruder / An der Schwester Saturnia Groll und heimliche Ränke と自然なドイツ語に変えている．alsobald は S による付加．

113　4や39と同様，SはIunonisをder Schwester Saturniaと訳す．

114　Hastig も S による付加. 113 の alsobald 同様, S はスピード感を表現する．

116　V の meo sine numine「わしの神意＝許しなく」の meo を S は訳さず，ネプトゥーヌスの別称は「大地を揺り動かす者」であることから，ohne des

Erderschüttrers Gebot と婉曲的な表現に変えている．また，ここは七脚韻となっている(V の方は六脚韻).

118　頓絶法が使われている. ネプトゥーヌスは感情のままに言葉をつい発するが，考えて中断する．quos ego―「さてこいつらをわしは」に「どうしてやろうか」などといった言葉が省略されている. V の ego が S では省略されている.

120　regique [...] uesto「お前らの王に」を S は eurem Beherrscher と訳す.

121-123　V では non illi imperium pelagi saeuumque tridentem,/ sed mihi sorte datum「大海の支配と非情な三叉の矛は，奴にではなく，このわしに籤引きで与えられた」と短い文であるが，S は三行にも渡って説明的に訳している．また，V では haec dicite「以下のことを伝えよ」だけであるのを, S は meldet (120) , Meldet ihm das (121), sagt's ihm (122)と三箇所にも渡って繰り返し訳す.

121　imperium pelagi「大海の支配」と V では名詞句なのを, S は Ich habe zu walten im ewigen Pontus と完全文にして長々と訳す.

122　saeuumque「非情な」を S は gewaltige と意味を変えて訳す．また，121 と同じく，V では saeuum tridentem と短い名詞句のみなのを S は mein ist der gewaltige Dreizack と一文にして長く訳している.

123-124　tenet ille immania saxa, / uestras, Eure, domos「あの男は巨大な岩山を，東風よ，お前らの住処として持っている」をSはIn scheußlichen Bergen / Eure Behausungen, Eurus, dort ist sein Reich und sein Wohnhausと構文を変えて長く説明的に訳している．Sは単語は異なるが，23や92のように，ここでも「巨大な」の意味の語(immania)を「恐ろしい」という意味の語(scheußlichen)に置き換える.

126　clauso uentorum carcere「風どもの閉ざされた牢獄で」をSはUnd wenn Wind und Wetter gebunden sindと改変する．このgebundenには24-25での牢獄で風や嵐を鎖で繋ぐ，という意味が込められていると考え，直訳は「風と雷雨が繋がれているのなら」であるのを，ここでは風神の視点で，風と雷雨を目的語にして意訳した.

127　dicto citius「こう言うや否や」をSはSprach's, und lange schonと訳す.

127-129　Vでは主語は全てネプトゥーヌスの三人称単数であるが，Sはdie Wassergebirge, Wolken, Sonneと文によって全て主語を変えている.

129　LächelndとUnd spiegelt sich mild im ruhigen MeereはVにはなく，Sによる脚色．原文はsolemque reducit「太陽を呼び戻す」のみ.

130　SのCimothoriのV原文の綴りはCymothoe．和訳の表記はラテン語の方に従った．zumalはVではsimul「一緒に」．mit kräftigem Armeも129と同じくV原文

にはない.

131　Vのacuto [...] scopulo「尖った岩から」をSはvon Klippenと訳す(acutoの意味を強調しない). 逆に，mächtigemはVにはなく，tridenti「三叉の矛で」のみ.

132　V の leuat は，その原義（苦しみなどを）「軽くする」から，「救いを差し伸べる」を意味するので，S は Hilft と訳す．Posidaon は V では ipse「(海神)自らが」. Neptunus のギリシア名 Poseidon から付けたものであろう. uastas aperit Syrtis「広大な浅瀬を開いてやる」を S は tut auf die greulichen Strudel und Klippen と違う内容に翻案する．23,92,99 などと同様，ここでも「巨大な」の意味の語(uastas)を「恐ろしい」という意味の語(greulichen)に置き換える.

133　den Meersturm は V では aequor「海面を」.

133-134　rotis summas leuibus perlabitur undas「車輪も軽やかに海面を滑り去る」を S は rasch jagen dahin die flüchtigen Räder / Mit dem Wassergott über die obersten Wirbel der Wogen と，Mit dem Wassergott と Wirbel も付加して脚色する.

135　V 原文は ac ueluti magno in populo cum saepe coorta est / seditio saeuitque animis ignobile uulgus「あたかも多くの群集によく暴動が生じ，下衆らは興奮して荒れ狂う時のように」(V.1,154 の sic につながる)であるが，S では So wenn ein zahlreiches Volk in gärendem Aufruhre tobet と二文が一文に短くまとめられている.

136　V では faces et saxa「松明と石が」の動詞は uolant「飛ぶ」一つであるが，S では Fackeln に wallen, Felsen に fliegen とそれぞれ別の動詞がある．また saxa を Felsen と訳している．Felsen の訳は厳密には「岩」であるが，ここでは大きな石を指す.

137　tum, pietate grauem ac meritis si forte uirum quem / conspexere「そのとき，忠心と功績ゆえに尊敬される勇者を，もし偶然彼らが見たなら」は，S 訳では Und itzt ein verdienstreicher frommer Alter sich fern zeigt と Alter が主語になっている. fern は S による付加.

138　S ではこの一行に三度も繰り返し強調されている alle「皆が」が，V には無い．原文は silent arrectisque auribus astant「沈黙し，耳を澄ましてその場に立ち尽くす」.

139　ille regit dictis animos et pectora mulcet「その人物が言葉で激情を制し，胸を鎮める（ように）」(V.1,154 の sic に続く)を S はこれも Er ist Meister der Herzen, und weicht sie mit Worten der Liebe と改作している．特に pectora を sie「彼らを」と訳し，原文に無い der Liebe を付加している.

140　この行も S の翻案色が強い．sic cunctus pelagi cecidit fragor「海のどよめきが全てやむと」を S は So versank auch der wogichte Pontus に so schwieg auch sein Donnern の文を付加し，静まる海の様子をより細かく説明的に記述する．
141-143　S 訳の最後の部分，ここもかなり改作されている．
141　sein Vater の原文は genitor. 本当の父親ではなく，ネプトゥーヌスを指した敬称．aequora postquam / prospiciens genitor「父神は海面を見渡した後」を S は Als sein Vater sein Haupt itzt erhoben と違う表現で訳している．
141-142　und über ihn hinflog, / Himmel entnachtet の原文も caeloque inuectus aperto「澄み渡った空へ進み出でて」と異なっている．entnachten は現代での使用はかなりまれ．
143　S は訳の構文を原文と全く変える．原文は curruque uolans dat lora secundo「順調に進む馬車に手綱をまかせて飛んで行く」．この curruque uolans [...] secundo を S は den leicht dahinhüpfenden Wagen と説明的に描写する．dahinhüpfenden の dahin-も S による脚色．また，rasseln という擬音語を用いて読み手の聴覚に訴えている．

４．シラー訳についての全体的な分析

以上の注釈におけるウェルギリウスとシラーの比較検討により, シラーの『ティレニア海の嵐』は単なる『アエネーイス』の翻訳，逐語訳ではないことがわかる．すなわち，シラーは『アエネーイス』を基にしてシラーらしく脚色し，新たなドイツ文学作品を創作した．そしてその仕方には，シラー特有の一定の癖もしくは傾向というものがある．

たとえば，シラーはあるところでは内容ばかりでなく語順まできわめて原文に忠実に訳しているが(70 など)，一方で，原文から離れて自由に改作しているところもある(51-55, 59-63 など)．その際，原文にない文や語を付け足すこともあれば，原文を削ることもある．

その改作箇所では，訳語を原文にはない擬音語に置き換えることにより，情景を思い浮かべやすくより具体的に表現することがある(63, 69, 83 など)．臨場感を高めるためか, 原作にはない nun, itzt, alsobald, hastig といったような時を表す副詞を入れることも多い(71-72, 112, 114, 141 など).

また, シラーは原文より生々しく激しい表現を使う時がある(鮮血が傷口から迸るという脚色をしている 5 など)．特に悲惨な状況はより悲惨に描写する．海

上を彷徨う舟の被害状況を原作よりもいっそう深刻に過酷に描くことが多い(90, 93-94, 110 など，原文は運び去られた，といった表現であるのを，シラーは打ち砕かれたとか，粉々になった，といった表現に置き換える)．原作のパトスをかき立てるシーンを，シラーはパトスをより昂揚させて表現する．当時の Sturm und Drang の時代風潮を反映してのことかと思われる．

さらに，原作の方はわかりやすいストレートな表現であるのに，詩的ではあるが，逆にいえば，回りくどい表現に変えたりすることが多い．たとえば，シラーは「大きい」という意味を表す語を「恐ろしい」という意味のさまざまな語に置き換えたり(23, 92, 99, 106 など)，時にはそれと逆のことをする(122)．また，「嵐・暴風雨」,「(海)水」といった異なる意味を表す語の訳語に, Hagel(83,103) や Hagler(61)という同じような語を共通して用いる(Sturm, Meerwasser など，別の言葉で訳し分けた方がわかりやすいにもかかわらず).

同様に，訳語にシラーは当時でも使用頻度の少なかった珍しい単語や文語を用いる(10,140 の wogicht や 6 の übermachten など).

同じことは，原作では登場人物(神々)が本名で書かれているのに，シラーがわざわざ添え名に置き換えていることにもいえる(4,39,113 の Iuno→Saturnia, 17,37 の Iuppiter→der Donnerer, 116 の Neptunus→der Erderschüttrer など).

これらは，シラーが韻律を dactylus(長短短格，ドイツ語では強弱弱格)や spondeus(長長格，ドイツ語では強強格)に合わせるよう，訳語を無理に変えたことから起因するのかもしれない.

そして，シラーによる脚色のゆえか，誤解のためかは不明であるが，ところどころ誤訳がある(2, 27).

このように，全体的に，難しい語句，婉曲的な表現，使用頻度の少ない単語，いわゆるラテン語的ドイツ語(Lateinisches Deutsch)も多く使っているので，もしも観客が，朗読なり劇場での上演なりで，これを聞くだけで瞬時に理解できるかといえば，難しいかもしれない．そのため，シラーは後続の作品を，ヘクサーメターから韻律の枠にとらわれないシュタンツェ形式に変えたのであろう．

（なお，シラーの他の『アエネーイス』翻案との比較，その意図，韻律などの分析に関しては，紙面の都合上，次の機会に譲りたい.）

参 考 文 献

＜テクスト＞
本稿が用いたシラー訳文テクスト：
Thalheim, Hans-Günther, u.a. hrsg., *Friedlich Schiller, Sämtliche Werke in 10 Bänden, Berliner Ausgabe* auf CD-ROM, Berlin 2008. (特に Fix, Peter, Bd. 7b, *Übersetzungen.*)

『アエネーイス』テクスト：
Mynors, R.A.B., *P. Vergili Maronis opera*, Oxford 1969.

＜二次文献など＞
Ingenkamp, Heinz Gerl, u.a. hrsg., *Schillers Werke, Natinalausgabe*, 15. Bd., Teil 1, *Übersetzungen aus dem Griechischen und Lateinischen*, Weimar 1993.

Müller, Ulrich, Vergils „Aeneis“ in den Übersetzungen von Friedrich Schiller und Rudolf Alexander Schröder. Ein Vergleich. in: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 14, 1970, S.347-365.

Hirzel, S., hrsg., *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*, 16 Bd., in 32 Teilbänden, Leipzig 1854-1960. (http://germazope.uni-trier.de/Projects/DWB)（有名なグリム独語辞典．作られた年代がシラーの時代とそう離れていないため，現代の辞書にない古語のような語彙も載っている．ただし参照はしたものの，この辞書に載っている語彙の意味が，必ずしもシラーの使用している語の意味と合致しない場合が多かった．シラーが用いる語彙の意味は，ラテン語原文と照らし合わせて初めて判明するものである．例）entnachten など）.

謝 辞

中務哲郎先生には学生時代以来，大変お世話になりました．私が今，非常勤講師として主として独語教育に携わっているのも先生のお陰です. このような日常の影響もあり，ドイツと古典文化の繋がりについても積極的に取り組みたいと思い, 本題を選びました. この場を借りて厚く御礼申し上げます.

また，2009 年 12 月 12 日，名古屋大学西洋古典研究会にて「ゲーテ時代におけるラテン文学の翻訳―シラーによるウェルギリウス『アエネーイス』翻訳を例に」との題で講演を行う機会を賜り，西洋古典学専攻の小川正廣先生，吉武純夫先生，内林謙介氏，さらに独文学専攻の清水純夫先生より貴重なご質問，ご指摘を頂きました. そして私に「ゲーテ時代の古典翻訳」というテーマを勧めて下さったのは同志社大学の三ツ木道夫先生です．皆様のご支援に深く感謝申し上げます.